

藤澤利喜太郎生誕 150 年記念市民講演会について

藤澤利喜太郎は、近代日本数学界の研究・教育・社会貢献の全ての面の礎を築いた数学者です。彼の息子の回想に「何故数学を専門にしたのかと聞いたときに、即座に日本人にとって数学と物理学とは非常にむずかしい上に、之が分らなければ日本は世界的に発展出来ないから御国のためにやったのだと答えてくれた。」とあるように、国家のために数学を専門にすることを決意し、精力的に数学界のために尽くしました。

藤澤は 1861 年生まれで、2011 年は生誕 150 年の記念すべき年にあたります。そこで、日本数学会理事会は 2011 年を藤澤利喜太郎生誕 150 年祭の年として、藤澤の事績を振り返り、当時の数学および数学者が果たした存在意義を再確認したいと考えました。

近代日本にあって、菊池大麓がまず西洋流の数学教育を導入したのに対して、藤澤は数学関係では始めて本格的な研究論文を執筆しドイツで理学博士となり、ドイツ流のゼミナール方式を数学研究のために導入し、高木貞治など後進を育成しました。中等教育のために教科書を執筆し、教員講習も行いました。また、国体護持のためには、生命保険制度が必要と説き、配当制度も提言し、簡易保険の導入にも尽力しました。さらに、第一回普通選挙の統計的な分析も行い選挙制度への提言もしました。

藤澤は大正 12 年 9 月 1 日の関東大地震によって引き起こされた火災により家財をすべて失いましたが、復興に当たっては当時の東京市の縮小、地方の多数の小都市へ分散を提言するなどもしています。晩年は政治家としても活躍しました。

藤澤利喜太郎の社会貢献の面を語るのに最適な方として清水達雄先生（元清水建設研究所）に依頼し、2011 年度年会に合わせて 3 月 19 日に記念の市民講演会を企画しましたが、東日本大震災の影響で中止となりました。その代わりに、日本科学史学会の年総会日程に合わせ 2011 年 5 月 28 日に共催として開催しました。その講演はほぼ予稿に沿って行われましたので、以下にそれを掲載します。また、当日の資料とした、藤澤利喜太郎著『総選挙読本 普通選挙の第一回』の目次、及び、藤澤利喜太郎著『1928 年初回男子普通選挙結果の統計的考察』も掲載することにしました。

さらに、高木貞治著「日本の数学と藤澤利博士」の部分引用し、略年譜を掲載し、藤澤利喜太郎の多方面の活躍を伝えたいと思います。

担当理事 真島 秀行 記